

中学校⁹

平成 10 年 度

教育研究員研究報告書

外国語 (英語)

東京都教育委員会

平成10年度

教育研究員名簿(外国語)

分科会名	区市町村名	学 校 名	氏 名
第1学年分科会	目黒区	東山中学校	湯浅雅人
	大田区	大森第四中学校	渡邊一史
	北区	十条中学校	柳 歆子
	青梅市	第七中学校	江藤 誠
第2学年分科会	中野区	第二中学校	栗山 順
	杉並区	杉森中学校	会田 均
	八王子市	宮上中学校	阿部 伊知郎
	東久留米市	南中学校	近藤 江美
第3学年分科会	江東区	東陽中学校	山本 修
	板橋区	赤塚第一中学校	○小野寺 史好
	足立区	第十一中学校	◎山田 順一郎
	三鷹市	第三中学校	佐々木 勝
	町田市	金井中学校	□長澤 利尚

◎ 世話人 ○ 副世話人 □ 記録

担当 教育庁指導部主任指導主事 中 村 馨

研究主題

生徒がのびのびと意欲的にコミュニケーション活動に取り組む指導の工夫

目 次

I	研究主題及び主題設定の理由	2
II	研究構想図	3
III	生徒の実態	4
IV	研究内容	5
	観点について	5
	第1学年分科会	6
	1 研究のねらい	6
	2 具体的工夫点	7
	3 事 例	8~9
	4 授業の考察	10
	5 工夫・成果・課題	11
	第2学年分科会	12
	1 研究のねらい	12
	2 具体的工夫点	13
	3 事 例	14~15
	4 授業の考察	16
	5 工夫・成果・課題	17
	第3学年分科会	18
	1 研究のねらい	18
	2 具体的工夫点	19
	3 事 例	20~22
	4 授業の考察・成果	23
	5 課 題	23
V	研究のまとめ・今後の課題	24

I 主題設定の理由

1 研究開始までの問題意識

- これからの社会の変化に主体的に対応し、自らが意欲的に学習を進めていける生徒を育成するには、どのような授業を工夫していけばよいのか。
- A E Tとの授業など、実際の場面の中での実践的な英語の運用能力を高めていくにはどうすればよいのか。
- 受験などの現実的な問題と、その一方で社会で今求められている英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成との関係をどう考えていけばよいのか。
- 生徒が楽しく、学ぶ喜びを味わえる授業をどう作っていけばよいのか。
- 外国の言語や異文化に対する理解や関心が、生徒の意欲的な英語学習につながるのではないか。
- 易しい基本的な力を身につけさせることが、生徒の意欲的な態度を引き出していくのではないか。

2 目指していく方向

- 生徒の、自分のことを相手に伝えたい、また相手のことを知りたいという気持ちを大切にしていく。
- 形式的な練習ではなく、生徒が自分の表現したいことを表現しようとする意欲を大切にしていく。
- 細かい文法上の誤りはあまり問題にせず、生徒の伝えようとする意欲を大切にしていく。
- 一文一文の完璧な理解を求めるのではなく、概要や要点を理解しようとする姿勢を大切にしていく。
- 楽しい雰囲気を作り、どの生徒も授業中に認められる雰囲気を大切にしていく。

3 主題設定の理由

実践的コミュニケーション能力（特に表現の能力）が必要であると言われているが、そういう能力を高めるためには、何よりも実際に英語を使用する機会を増やすことが必要である。その際、単なる機械的な練習の繰り返しだけでは本当の力を付けることにはならない。あくまでも自分が伝えたいこと、相手について知りたいことを伝え合うことが大切である。

そのためには、生徒が必要以上に間違いを恐れたり、自分を抑えたりしないですむようにしなければならない。また、お互いを受け入れ合う暖かな雰囲気もなければならない。つまり、「のびのび」とした状態で学習に取り組むことが大切であると考えた。

このことを踏まえて仮説を立て、学年に応じた指導の工夫ができるように各学年ごとに分科会を作り、研究を行った。

II 研究構想図

生徒・授業の実態	学年の進行に従って、「英語が好き」「英語の授業が面白い」という生徒の数が減っている。
----------	--

目標とする生徒像	一人一人がお互いの個性を認め合い、自分の使える英語でのびのびとコミュニケーションできる生徒。
----------	--

研究主題	生徒が、のびのびと意欲的にコミュニケーション活動に取り組むための指導の工夫
------	---------------------------------------

仮説	身近な題材を用い、評価の工夫をしながら、気軽にコミュニケーションできる場を継続的に作っていけば、生徒がのびのびと意欲的にコミュニケーション活動に取り組むであろう。
----	---

研究の視点

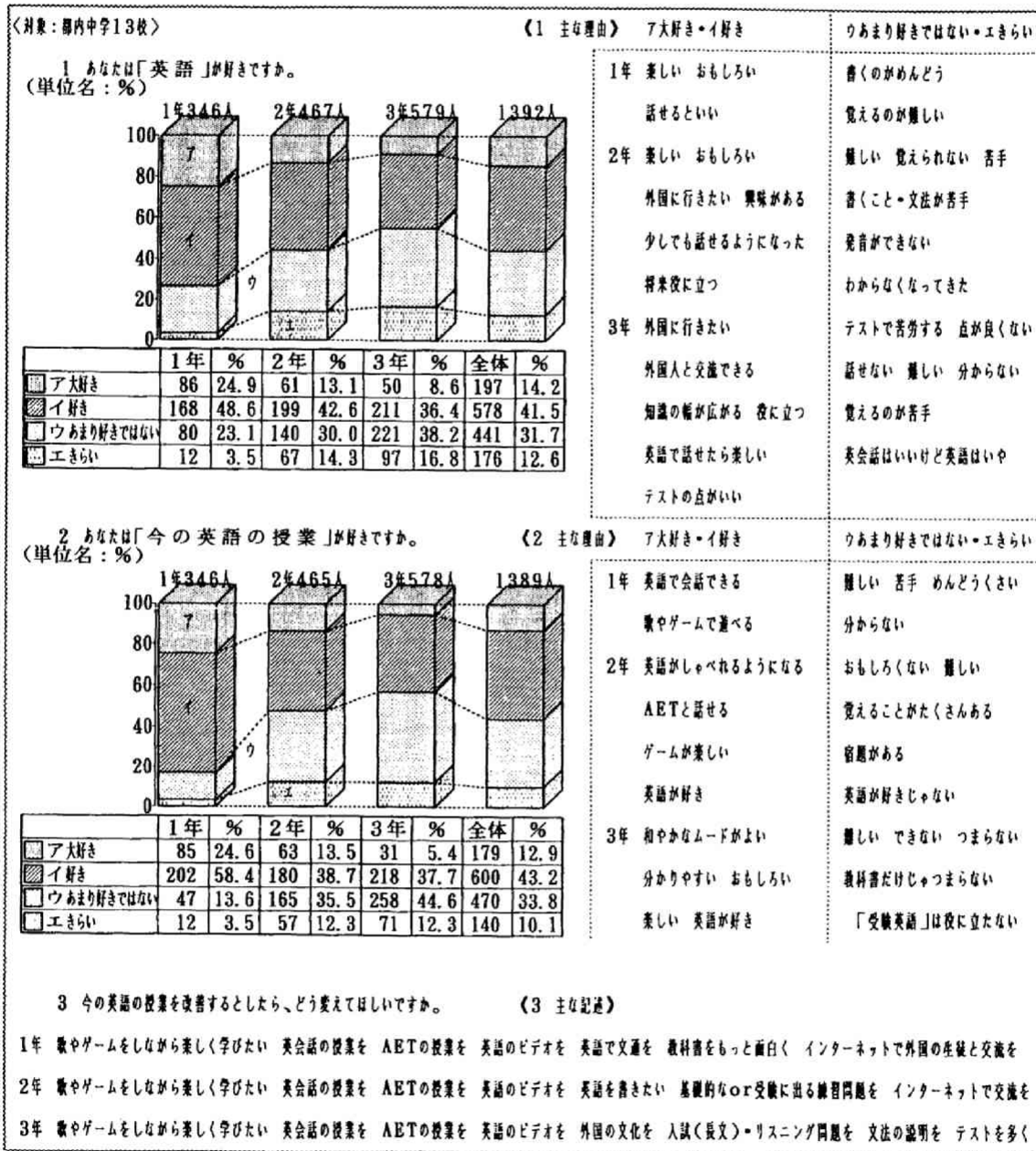
題材	活動の場	評価
生徒個々の興味・関心に差があるので、様々なものに触れるようにする。 学校生活・スポーツ 芸能・環境問題など	個人、ペア、グループなどいろいろな形態を使いながらあらゆる「機会」「時間」を使って、継続的に活動の場を作っていく。	生徒の活動の励みになるように、評価の方法を工夫する。

研究授業

第1学年	第2学年	第3学年
<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自分の立場で発言できる場面を増やす。 大事なポイントがわかる。 達成感をもてるようにする。 テンポよく授業を進める。 生徒の良い点を見つけ、励ます姿勢で臨む。 	<ul style="list-style-type: none"> 他人や社会の出来事に興味をもたせる。 自分の体験や考えを表現できるように支援する。 既習の言語材料を積極的に使わせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中に明るい雰囲気を作っていく。 生徒の情意面の評価を積極的に生かしていく。 内容に関する関心を高めるために、トップダウン方式を取り入れる。

Ⅲ 生徒の実態

主題設定の後、研究のガイドラインとするために、5月末から6月始めにかけて一斉にアンケートを行った。その内容は【1あなたは「英語」が好きですか。その理由は。】、【2あなたは「今の英語」の授業が好きですか。その理由は。】、【3今の英語の授業を改善するとしたら、どう変えてほしいですか。】というものである。結果は以下の通りである。



以上のようなアンケート結果から生徒はコミュニケーション活動を通してのびのびと楽しく授業に取り組むことを望んでいる。特に学年が低いほどその傾向が強い。反対に学年が上がるほど英語に対する苦手意識をもち、英語に興味を失い、さらに英語ぎらいになる生徒が増える。また、3年生になるとコミュニケーション活動より役に立たないと感じながらも受験を強く意識した授業を望む傾向があることも否定できない事実である。

IV 研究内容

観点について

仮説『身近な題材を用い、評価の工夫をしながら、気軽にコミュニケーションできる場면을継続的に作っていけば、生徒がのびのびと意欲的にコミュニケーション活動に取り組むであろう』を受け、その仮説実証のため各学年はどのような工夫をしたらよいのかと考えたとき、以下の三つの観点から研究主題に迫ることとした。

1 題 材

生徒にとって身近な題材とはどのようなものだろうか。学校生活・芸能・スポーツ・環境、社会問題等様々なものが考えられる。当然、学年が上がれば知的レベルが上がるだろうし、また、生徒個々の興味・関心にも違いがあるので、あらゆるものに触れる必要がある。大切なことは、生徒同士が意見や考えを交換したくなるような題材だということである。

2 活動の場

授業の中で、気軽にコミュニケーションできる場面をいかに継続的に作っていくことができるかがポイントである。それは、基本的なパターンを体でおぼえてしまうようなものから、ある程度の自己表現ができるものまで、幅広く考えていかななくてはならない。そのために、個人・ペア・グループなどいろいろな形態を使い、スピーチ・スキット・ゲーム・ディスカッションなどあらゆる言語活動の機会や時間を与えていくこととした。

3 評 価

評価というと、教師による評価・生徒同士による相互評価・生徒個人による自己評価に大きく分けられる。どの評価も教育活動を行う上で欠かせないものであるが、共通していることは、生徒の今後の意欲につながる評価であるべきだということである。

今回の研究では、その中で主に教師によるその場での評価を考えた。例えば、のびのびとした意欲的なコミュニケーションのためには文法的な細かいミスにはあまりこだわらず、意欲的にコミュニケーションをしようとした態度を認めるなど、良いところを見つけほめることが大切である。生徒一人一人の活動を見つめ、認め、励ましていく評価を工夫した。

第1学年分科会

1 研究のねらい

(1) 生徒が自分の立場で発言できる機会を増やす

自分の意見や考えを英語で表す、いわゆる生徒の自己表現を促すことの重要性はわかっていながら、即習事項やボキャブラリーの少なさから、かなりその活動は制限されてしまう。しかしその中でも毎時の授業で、少しでも自分の立場での発言をさせる。例えば教科書の本文を扱うところでも、登場人物を自分に置き換え、所属クラブや好きなもの、見ているテレビ番組などを言わせたりして、自分のことを話す機会を作ることはできる。生徒の身近な話題で自主的に意見の交換をしたいという意欲をかき立てるようにする。

(2) 全てを理解できなくても、大事なポイントがわかるようにする

一文一文を完璧に理解しようとすることは、言語学習の際に時には弊害となることもある。リスニングや読解においても、全体の概要や要点を理解するということの大切さもある(トップダウン方式)。そうすることにより、生徒が安心して参加できるような雰囲気を作っていく。

(3) 生徒が達成感をもてるようにする

学年、クラスにはいろいろな生徒がいる。暗記が得意、読むのが得意、自分を表現するのが得意等様々である。個人差はもちろんあるが、その一人一人が達成感をもてるものでなくてはならない。日頃ほとんどしゃべらないおとなしい生徒が、「スキットの1文を覚えて発表できた」「簡単な単語が言えた」など生徒各自が自分で達成感を感じることで、活躍できる場を作るように工夫する。

(4) テンポよく授業を進めるようにする

1年生はまだ学習する文法事項も少なく、頭で覚えるというより体で慣れ楽しみながら学んでいく方が適している。オーラルの授業を主体としてリズムカルにテンポよく授業を進め、楽しみながら多くの練習量をこなし、活気ある授業づくりを行う。指名の仕方も工夫する。

(5) 生徒の良い点を見つけ、励ます姿勢で臨む

音読、単語・アルファベットの発音、誰にでも必ず良いところがある。常に生徒一人一人の良いところを見つけ出し、励ます姿勢で授業に臨み、同時に生徒が友達の発言、活動を互いに認めあうように促し、全体が肯定的に接しあうことを習慣づけ、生徒が安心して発言、活動できる雰囲気を作る。

2 具体的工夫点

(1) 授業の導入を工夫する

英語の歌、生徒が興味をもてるような身近な話題についての簡単な会話、簡単なゲームなど、生徒が楽しく参加できるような活動からスタートし、明るく楽しく積極的に授業に参加しようとする雰囲気を作っていく。

(2) リズムを取り入れる

リズムボックス等を使ってリズムパターンを作成し、単語や文の発音練習をリズムに乗せて行う工夫をする。リズムカルに発声することで、楽しみながらいつの間にか多くの練習量をこなせるようにする。

(3) ゲームを使う

ゲームを通じて、楽しくコミュニケーション活動を行えるよう工夫する。生徒が気楽にまた、積極的に参加できるよう、ゲームはシンプルで分かりやすいものを使っていく。

ゲームの内容をシンプルにすることにより、どの生徒ものびのびと参加でき、英語の得意・不得意にかかわらずゲームの勝者になれる可能性をもたせる。ゲームの勝者には、黒板に名前を書き出す・簡単な賞状を与えるなどの評価を行い、やる気をもたせるように工夫する。

(4) スキットを使い、教科書の内容を自分たちの立場に置き換える

教科書の本文を学習するにあたり、ただ理解・暗記するだけでなく、単語や文の一部を自分の立場に即した内容に置き換えてスキット化し、発表させる。自分の立場での内容に置き換えることによって、自己表現につなげていくこともでき、聞いている生徒たちも興味をもって聞くことができるようになる。

(5) のびのびと活動できるような集団の雰囲気を作る

ゲームや会話・スキットの発表などで生徒が表現活動を行う際、聞いている側も肯定的に受け止め、励ましの姿勢で臨み、評価するように指導し、生徒が安心してのびのびと表現できるような集団の雰囲気を作る。

3 事 例

(1) 単元名：NEW CROWN ENGLISH SERIES 1（三省堂）

Lesson 5 Do You Like Festivals?

(2) 教材観：題材について

- ① 日本の伝統行事である祭りを通して、日本の文化の理解を深める。
- ② 中国の祭りや音楽を通して、中国文化を知るきっかけとする。
- ③ 祭りや音楽を通して、日本と中国の文化について考えるきっかけとする。

言語材料について

- ① 人称代名詞 he、she、指示形容詞、疑問詞 who の基本的な用法をまとめる。
- ② 複数形の基本的な用法をまとめる。
- ③ How many～? が含まれた文を使ったコミュニケーション活動に取り組みさせる。

(3) 指導計画：第1時：本課全体の要点、新出単語の把握、説明。

第2時：Section 1 の内容理解。

人称代名詞 he、she を使った練習問題。

第3時：Section 2 の内容理解。

疑問詞 who と人称代名詞を使った言語活動。

本 時 第4時：Section 3 の内容理解。

複数形の確認。

How many～? の文を使った言語活動。

第5時：Lesson のまとめ。

Listening Check

(4) 本時の指導目標：① Section 3 の内容理解。

② 複数形の基本的な用法の確認。

③ How many～? の文の確認。

(5) 研究主題・仮説との関連

① 生徒にとって身近な題材（ハンバーガーショップでの買い物）の英文を用いて、How many～? の文と複数形の用法の理解・定着を図る。

② 自分から英語を使って相手に話しかけ、内容を伝えようとする努力を評価し、そして、伝えられたという成就感が、さらに英語学習への意欲につながるように指導する。

(6) 本時の指導計画

指 導 過 程		教 師 の 指 導	生 徒 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	あいさつ Bingo	単語を2回ずつ読み上げる。 Bingoした生徒をチェックしていく。	単語を聞き取りチェックする。	単語をしっかりと聴き取らせる。

展 開 ①	教科書本文の内容理解	Section 3 の内容を OHP を使って説明する。	スクリーンを見ながら説明をしっかりと聴く。	Lesson 全体の説明を受けて、生徒に質問をしながら説明をし、より深い理解をさせる。
	T or F	文を 2 回ずつ読む。	英文をしっかりと聴いてワークシートに書き込む。	生徒の理解度を確認し補足する。
展 開 ②	本文のリスニング 新出単語の確認	指名して解答の確認をする。 本文を CD で聴く。	解答のチェックをする。	しっかりと声を出しているかどうか。
	本文の音読	新出単語の発音・意味の確認。	大きな声で発声し、意味の確認をする。 教師のあとについて、大きな声で読む。	
展 開 ③	本文の読みペア練習	本文の音読 教科書を見ながら読む。 教科書を見ないで読む。 パート別に分かれて読む。 隣り同士でパートを決めて見ないで言えるように指示を出す。 名前や、持ち物などを自分に置きかえて練習するように指示を出す。 何組かに発表させる。	ペアで大きな声で練習する。 相手と協力して練習に取り組む。 大きな声で発表する。	しっかりと取り組んでいるかどうか。
	複数形、 How many～? の用法の確認	プリントの配布。 単語、表現の読みの練習。 進め方の説明。	読み方の確認。	進め方の説明をしっかりとしてから取り組ませる。
ま と め	最終確認	進め方 ・ 各班に買い物リストと売り物リストを配布する。 各班で定員になる生徒一人と、買い物に行く順番を決める。 ・ 最初の生徒が買い物をして戻ってきたら、次の生徒が買い物に行き、すべて買い終えたら終了。 ・ 客が英語を使わなかったら、店員は売らなくてよい、また店員が英語を使わなかったら、客は好きなものをもらえる。		英語を使って進めているかどうか確認する。
		Q & A で最終的に確認する。 文型についての確認をする。 本文を読んでもう一度確認する。	よく聴いてワークシートに書き込む。 内容を確認しながら読む。	

(7) 評 価

- ① 複数形の基本的な用法が理解できたか。
- ② How many～? を使って、自分のことを表現したり、相手の言っていることを理解しようとしていたか。
- ③ 自分から積極的に話そうとしていたか。

ハンバーガーショップでお買い物

班員みんなでパーティーをすることになりました。班で協力してリストにしたがって、必要なものを買出しにいきましょう。一番早く買い終えた班が勝ちです。

今日の表現

Clerk (店員) : Can I help you?
Customer (客) : Yes. Hamburgers, please.
Clerk (店員) : How many hamburgers? (店にある時)
 Sorry. We have no hamburgers. (店にない時)
Customer (客) : Two. And one apple pie, too, please.
Clerk (店員) : O. K. Here you are.
Customer (客) : Thanks. Bye-bye.
Clerk (店員) : Thank you very much.

Vocabulary

one hamburger / two hamburgers
one apple pie / two apple pies
one cheeseburger / two cheeseburgers
one fish burger / two fish burgers
one milk shake / two milk shakes
one French fry / two French fries
one cola / two colas
one spicy chicken / two spicy chickens
one home pack / two home packs

買い物リスト
You need to buy these things.
2 hamburgers
1 apple pie
4 spicy chickens
3 colas
1 milk shake
2 home packs

売り物リスト
You can sell these things.
5 hamburgers
5 apple pies
5 fish burgers
5 colas
5 milk shakes
5 home packs

4 授業の考察

ア 英語の授業にのれるように、授業の最初にビンゴを取り入れている。生徒の反応はよくこれから英語の授業を始めるといふ、気持ちの切り替えにつながっている。

イ 教科書の本文を、ペアで練習してかつ自分の立場に置きかえることで、生徒はただ暗記するだけではなく、自分から進んで身近な英語を使っているという実感につながる。

また二人で進めることで、お互いに助け合うことができ、一人では学習を進めることが難しい場合でも、「自分にもできた」という達成感がもてる。

ウ ペアでの発表の時に、生徒同士がよく聴いて相手の良いところを見つけるという点が、生徒にはよい動機づけになった。

教師も、その都度評価を与えるように努めたが、ただほめるだけではなく、もう少し具体的に良い点を評価した方が生徒の意欲には結びつくと感じた。

エ 言語活動ではゲーム性を取り入れたことで、生徒は意欲的によく取り組んでいた。継続していけば、意欲の低い生徒や、理解の遅い生徒でもその雰囲気になじんで活動できるようになると感じた。

5 工夫・成果・課題

(1) 工夫・成果

- 生徒が自分の立場で発言できる機会を増やすことにより、生徒が自己表現しようとするきっかけにすることができた。また、自分自身の状況に即した内容を表現することによって、より深い理解につなげることができ、定着度も高めることができた。
- 全てが理解できなくても大事なポイントがわかればよいという意識を育てることによって、生徒が安心してのびのびと授業に参加できる雰囲気を作ることができた。
- 生徒が達成感をもてるよう工夫することにより、それぞれの生徒が自分の能力を生かして活躍する場を作ることができ、生徒が積極的に楽しんで授業に参加しようという気持ちを作っていくことができた。
- テンポよく授業をすすめることによって、生徒が楽しみながら活動でき、積極的に授業に参加する雰囲気を作り出すことができた。また、楽しく活動しているうちに自然と多くの練習を行うようになり、1年生の段階では大切な「からだで覚える」という目標をある程度達成することができた。
- 生徒の良い点を見つけ励ましの姿勢で臨むことにより、一人一人の生徒が安心してのびのびと活動できる雰囲気を作ることができた。

(2) 課題

- オーラルを中心として、テンポよく授業を進めていくためには、英語で授業を進めていく指導者の英語力とともに、生徒の反応を見て授業のテンポを作っていく柔軟な授業作りなど、指導者の力量が要求される。そのために、常に指導者としての研鑽を積んでいく努力が必要である。
- 生徒が安心して活動するには、教師が励ましの姿勢で臨むと同時に、暖かい雰囲気での学習集団を作っていくことが重要である。そのためには、常に生徒理解に努め、より良い集団を作っていく必要がある。
- 1年の段階で行ったスキット作りなどを、これから2年・3年と学習していく中で、より高度な表現活動へ発展させていく必要がある。

第2学年分科会

1 研究のねらい

第2学年分科会では、研究のねらいを3つの柱にまとめた。

(1) 他の人や社会の出来事に興味をもたせる

2年生という時期は1年生の時よりも精神的にももの考え方に社会性が出てくる時期である。従って、教科書の内容についても社会的な事象に少しでも関連させながら、自分の身の回りで起こっている事に興味をもたせながら指導を展開させていく。

例えば、教科書の中に、環境問題を扱う場面があったら、その内容を発展させて、自分達のこれからの未来の環境について、自分達にできることなどを、問題提起していく。

ただ単に教科書の内容理解に終わらせるのではなく、その内容を発展させていく指導をしていく。

又、他人の意見等に耳を傾けさせ、自分の意見との違いに気づかせながらより社会的なものを見方ができるように指導していく。

(2) 自分の体験や考えを表現できるように支援する

2年生という成長過程の中で一番目立つ特性は自己主張ができることである。

これを、英語でのびのびと表現させていく。教科書で扱うテーマについて生徒達の様々な実体験を積極的に授業の中で発表させていく。そして、それらの体験を今度は、自分の意見に発展させていくような展開を試みる。ペアワーク等の練習の中で、生徒達が、単に1つの文型だけの練習にとどまるだけでなく、自分の実体験、そして、意見に発展していく練習の工夫をしていく。

(3) 既習の言語材料も積極的に使わせていく

1年生と違って、2年生になると語彙力・文法力・表現力がかなりついてくる。

授業の中では、ターゲットセンテンスがその授業の中心になりペアワークでも限られた表現になりがちである。これを一歩進んであるテーマについて、ターゲットセンテンスはもちろんのことであるが既習の表現を積極的に使わせながら(2)のねらいに近づけていく指導をする。つまり、教科書の内容や言語材料を発展させたコミュニケーション活動の場面を作っていく。

生徒は文法的に正しい英語を使わないとなかなか自分から積極的にコミュニケーション活動に参加しないが、自由な雰囲気、間違いを気にせずに自分の意見を表現していきけるよう、支援していく。

2 具体的な工夫点

(1) ウォーミングアップは、身近な題材を用いる

考えられるもの……学校生活・テレビ番組・マンガ・音楽・映画等・ゲーム等
社会問題・教師と生徒のQandA、生徒同士のQandA

※ゲームについては、マンネリ化にならないようにバリエーションを工夫していく。

(2) ペアワーク・グループワーク

1つの文型にとらわれず、既習の文型等を使いながら自分の意見等が発表できるように指導、助言する。相手の内容について、メモをとらせる。

※ワークシートの工夫

※どうしても、分からない単語が出てきたら、日本語の使用を認める。

※文法的なミスに気をとられないように自由にスピーチできる雰囲気作りをする。

(3) オーラルでの授業

生徒にできるだけ英語を聞かせ、英語に慣れさせ、少しでも理解できる喜びを与えるように支援する。

※導入の部分では、身近な題材・ピクチャーカード等を用いる。

(4) 評価の工夫

○ 教師による評価

コミュニケーション活動の場面に既習の言語材料を使いながら、自分の実体験に基づいた意見を表現させることに重点を置いた。1年時の積み重ねを生かしながら、それを実際のコミュニケーション活動につなげていく工夫を試みる。

2年時ということで、学力に差が出てくるが、文法的にミスがあったり、単語が分からなかったりしても、とにかく相手に伝える努力を評価していく。

○ 相互評価

ペアワーク・グループワーク等で生徒が発表したものについては生徒同士の評価を行う。その評価をまとめて、発表した生徒達にフィードバック。

3 事 例

(1) 単元名 NEW CROWN ENGLISH SERIES 2 (三省堂)

Lesson 8 “Ainu”

(2) 本時の指導目標

- Section 1 の音読・内容理解を通し、北海道がかってアイヌ民族の土地であったことを知る。
- 動名詞を使った言語活動

(3) 研究主題との関連

- ア 身近な題材についてすすんでコミュニケーション活動が行えるようにさせる。
- イ グループでの発表活動の場を与え、自分の考えを伝え、相手の話を聞けるようにさせる。
- ウ 生徒の発言、発表に対し、適時、プラスの評価を与えていく。
- エ 相互評価をし、自分たちの良い点や悪い点に気づかせる。

(4) 本時の指導計画

	時間	学習項目	教師の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	3	• English Song “Edelweiss”		• 英語の歌を聞く。	• なごやかな雰囲気をつくる。
	5	• Oral Interaction	• 本文の内容を picture cardsを 使い理解させる。	• 教師の問いに対して 答える。	• 興味をもってやり とりをしていたか。
	5	• 基本的な動名詞の 文の練習	• いくつか身近な例 文を提示する。 • ワークシートに記 入させる。 • ワークシートにし たがって練習する。	• 例文の口頭練習 • 簡単な動名詞の文を 書く。 • 簡単な動名詞を含ん だ文で問答をする。	
展 開	2	• CDリスニング		• CDを聞く。	• リズム、イントネー ションなどに気をつ けて聞けたか。
	5	• 新出語句	• 意味の確認 発音練習	• 意味を確認する。 発音を練習する。	• テンポよく練習す る。
	5	• 本文の音読	• 教師のあとについ て2回練習させる。	• 教師のあとについ て2回練習する。 • 個人練習。 • CDのあとについ て練習。 • 音読発表	• 1回1回きちんと 取り組んでいるか。
	3	• 内容理解	• 本文について大切 な語句や文の意味 を説明する。		
	1	• CDリスニング		• 本文のCDを聞く。	• 意味を取りながら、 聞き取れたか。

	2	• T-Fテスト	• 本文の内容について確認する。	• ワークシートに記入する。	
	8	• -ing (動名詞)を使ったコミュニケーション活動	• 例を示す。 • 机間指導を行う。	• -ingを使った文を書く。 • グループ内で発表する。	• 相互評価カードを使い、班内で確認する。
	2	• "Who is this?" Game	• ワークシートをカードにして、読み上げる。	• だれについてのことが当てさせる。	
ま と め	3	• 内容のまとめ	• 内容について簡単にまとめる。		• 関心をもって聞こうとしているか。
	5	• 文法のまとめ	• 文法についてまとめ、板書する。	• ノートにまとめる。	• 本時のポイントがつかめているか。
	1	• 次時の指示 • あいさつ			

(5) 評価の観点

- ア 本文の内容を理解しながら、「読むこと」の言語活動ができたか。
 イ 動名詞をつかい、自分のことを、簡単な表現で言うことができたか。

p. 53 Work Sheet 2

- 1 ①の下線部に-ingを用い、「私は(ぼくは)～することが好きです。」という文を書いてみよう。
 2 ②③に適当な語句、文を入れ、自分のことについて書いてみよう。(④⑤にも書き加えてみるとよい。)

- ① I like reading books.
 ② It is fantastic.
 ③ For example, don't read books in dark room.
 ④ It's looks like ネガティブ people.
 ⑤ _____.

- 3 グループで発表してみよう。
 4 友達の発表についてA~Cのどれかに○をしよう。

Name	聞こえる大きさを発表していた	自分のことが言えていた	友達の発表をよく聞いていた
	Ⓐ B C	Ⓐ B C	Ⓐ B C
	A Ⓑ C	Ⓐ B C	Ⓐ B C
	A Ⓑ C	Ⓐ B C	Ⓐ B C
	A Ⓑ C	A Ⓑ C	Ⓐ B C
	Ⓐ B C	Ⓐ B C	Ⓐ B C

A…大まよい B…よい C…もうちょっと

2年 2組 31番 名前 _____

4 授業の考察

- ア 本時の授業は、身近な話題、題材を使ったコミュニケーション活動を目的としている。継続的にコミュニケーション活動を授業に取り入れていく中で、意欲的に取り組む生徒、自分のことを工夫し、楽しく表現できる生徒が見られ、教師の側もやりがいを感じることができた。
- イ 題材については、今までに職業や、前課の不定詞のところでlike to doの形の活動を行っているので、マンネリ化をしないようにアイデアを豊かにしておかなければいけないと感じさせられた。
- ウ また、コミュニケーション活動を展開の後半に入れているが、それまでのPattern Practiceをどこに入れるか、どのような練習をしていくか、ステップを踏んで、基本的なものから発展的なものにすすめていきたい。
- エ しかし、意欲の低い生徒や、理解の遅い生徒にとっては、なかなかコミュニケーション活動までたどりつくことは厳しく、いいかげんになったりすることも少なくない。興味のあるようなことについて例をあげたり、声かけをし、1つでもできたら、ほめるように心掛けた。
- オ Oral Interactionでは、簡単な英語で内容をよりわかりやすく提示していかなければならない。
- カ 導入時、(English Song, Oral Interactionで) もっと印象的にスムーズに入っていけるよう考えたい。
- キ クラスルーム・イングリッシュの使用が少ないので、もっと多用するよう心掛けたい。
- ク 評価では、具体的に良い点を取りあげて、生徒をほめることにより、他の生徒にも意識づけることができた。
- ケ 相互評価については、継続的に、工夫をしておこなってきたい。
- コ 視聴覚器材や大道具、小道具をできるだけ使っていきたい。
- サ 今後も、ねばり強く指導しながら、意欲や興味を喚起し、自己表現をしていく態度を育てていきたい。

5 工夫・成果・課題

(1) 工夫

ア 身近な題材を用いる

生徒の生活に全く関係のないような出来事を取り上げても、楽しい、積極的なコミュニケーション活動にはならない。やはり、生徒にとって身近な話題は何なのか、教師は常に探り、授業に取り入れることが必要である。具体的には、学校生活、友達や先生のこと、スポーツや音楽、テレビ番組などが考えられる。また、2年生としては、生徒が自分の意見を述べたくなるような、社会問題や環境問題なども話題に取り入れる。

イ 気軽にコミュニケーションできる場を継続的に作る

- ・ 授業の中で固定せずに、いろいろな活動の場を毎時間作っていく。
- ・ 自分の体験に基づくことや自分の意見などを表現する機会を与える。
- ・ 他の人の言ったことをよく聞き、返事や質問をさせる。
- ・ 既習の言語材料も用いるが、英語にできない、わからない表現には、日本語の使用も認める。

ウ 評価

- ・ 間違いを指摘することばかりにならないよう、ほめたり、認めたりする。
- ・ 教師が行なう評価以外にも、生徒同士の評価も取り入れる。

(2) 成果

ア 身近な題材を用いることにより、英語に対する抵抗感・違和感が少しずつ薄れ、英語で表現することの楽しさがでてきた。

イ 日本語の使用を認めたことにより、英語に対して苦手意識の強い生徒でも、なんとか自分なりの英語で表現してみようという意欲がでてきた。

ウ ほめる機会を多くすることによって、教室内の緊張感がなくなり、なごやかな雰囲気を作れた。

(3) 課題

ア 自分の体験に基づくことは、少しずつ表現できるようになってきているが、日本語でさえ、自分の意見をはっきり言うことが苦手な生徒が多く、英語になかなかならない。

イ コミュニケーション活動に時間がかかりすぎて、活動で用いたことをその場でまとめていく時間が不足しがちである。

ウ 生徒が間違いを気にしたり、日本語の使用に抵抗感があって、教師にすぐ頼り、わからない単語を教えてもらおうとすることがある。

エ 教師からの評価、生徒同士の評価のどちらにしても、マンネリ化してしまう。評価については、自己評価も含めて、さらに効果的な評価の仕方を考えていく必要がある。

第3学年分科会

1 研究のねらい

第3学年分科会では、「言語の理解、運用能力は、実際に言語を使うことによって伸長する。」と考え、主題達成のために、実際に授業を行い、その成果を測定し、仮説がはたして主題達成のために有効であるかを検証していくことが、この研究のねらいである。

仮説に基づく授業を行うに際して、次の点に留意することとした。

(1) 授業の中に明るい雰囲気を作っていく。

遠足、修学旅行、運動会、文化祭などの学校生活の話題の他に、スポーツやテレビ番組などの身近な話題を取り上げ、授業を親しみやすいものにしていく。

(2) 内容に対する興味・関心を高めるために、トップダウン方式を取り入れた授業展開を心掛ける。

まとまった内容を理解する力をつけるためにも、トップダウン方式の授業を多くしていく。

(3) 生徒の情意面の評価を積極的に生かしていく。

「ほめる」ことで、生徒の積極性を喚起し、英語を使用する上で、間違いを恐れない姿勢を作っていく。

「その場でほめる」ことを教師の基本姿勢として、評価の方法を工夫していく。

研究授業を通して、各人の工夫点を検証し、生徒が身近な教材と感じ、英語で積極的にコミュニケーションをする態度を育成するための授業の確立を目指す。

2 具体的工夫点

生徒を意欲的に学習に取り組むように動機づけるには、まず授業を行う前の環境づくりが必要である。そして、下記の内容を踏まえ、生徒がのびのびと意欲的にコミュニケーション活動に取り組むようにさせることを目標とした。

(1) 身近な題材を用いる

- 学校生活・テレビ番組・環境問題・社会問題など
- 生徒個々によって、興味・関心の違いがあるので、様々なことに触れる必要もある。

(2) 評価の工夫

- ア 教師による評価
 - 授業の中でタイムリーに賞賛、激励する。
 - スピーチを実施した後など、ハンコ、シール等を使用して、生徒に達成感をもたせる。
 - 活動に使用したワークシートに教師からコメントを与える。
- イ 相互評価
 - グループや個人で発表を行った際、内容や声の大きさなどについて、お互いに評価をシェア。
- ウ 自己評価
 - 各自でReadingを行ない、声の大きさ、イントネーション、意欲等について、自己評価カードに記入したり、暗唱カードを使い、自分の発表や表現についてどのくらいできたかをチェックさせる。

〈教師の基本姿勢〉

- コミュニケーション活動に取り組もうとする積極的な態度を特に評価する。
- 一人一人の生徒の能力を伸ばすための評価をする。
- 細かい間違いや文法ミスなどにこだわらず、良いところを見つけ積極的にほめる。
- 生徒の情意面の評価も積極的に生かす。

(3) 気軽にコミュニケーションできる場の設定

- 授業の中で、あらゆる「機会」「時間」を使って、英語を使わせる。
- 形態としては、個人、ペア、グループなどがある。

(4) 第三学年という時期を十分に考えながら、4技能（聞く・話す・読む・書く）のバランスを考えた指導をする。

(5) 全体から個へという学習を進めるために、トップダウン方式を取り入れていく。

3 事 例

(1) 単元名 COLUMBUS ENGLISH COURSE 3 (光村図書)

Unit 6 Judy's "New" Apartment

(2) 指導計画 第1時：本課全体の要点の把握、新出単語・連語の意味調べ

【本時】第2時：Section 1 の内容理解・音読

関係代名詞を使った言語活動（グループ活動）

第3時：Section 2 の内容理解・音読

関係代名詞を使った言語活動（自作BINGO）

第4時：Section 3 の内容理解・音読

練習問題（pp.48～49）

関係代名詞の主格と目的格の違い・目的格の省略の理解

第5時：環境問題についての意見交換

関係代名詞に関する入試問題の学習

(3) 本時の指導目標

- ・ Section 1 の内容理解と音読
- ・ 既習の関係代名詞の用法の確認（thatおよびwhichの主格と目的格、whoの主格）
- ・ 関係代名詞の定着を図るための言語活動（4人グループでの活動）

(4) 本時の評価

- ・ はっきりとした音声で口頭練習（音読を含む）ができたか。
- ・ グループ内で協力しながら、意欲的に活動できたか。
- ・ 関係代名詞を使った英文をしっかりと暗記し、話せたか。

(5) 本時の指導計画

指導過程		教師の指導	生徒の活動	指導上の留意点	
復	1	あいさつ	あいさつ	・あいさつ	
	5	前課の本文の音読練習	音読指導	・CDと同時に音読する ・自分のペースで音読する	しっかりと声を出して練習させる。
習	8	速読練習	速読指導〔※別掲1〕 ①pre-reading活動として、英語で質問する ②速読と答えの記入の指示 ③生徒を指名、答え合わせ	・質問に英語で答える ・すばやく英文を読み、答えを記入する ・答えを発表する	なるべく英語で表現させる。
	8	関係代名詞の用法の確認	①ワークシートの配布〔※別掲2〕 ②英文を読み上げ、答えを記入させる（PART1） ③生徒を指名、答え合わせ ④適語を記入させる（PART2） ⑤生徒を指名、答え合わせ	・英文を聞いて、答えを記入する ・答えを発表する ・英文を読んで、適語を記入する ・答えを発表する	
入					

		⑥同様の方法で、PART 3 ~ 4を進める ⑦英文を2つ選んで、発音指導(全体・個人) ⑧基本的な用法について質問する <ul style="list-style-type: none"> ・関係代名詞は「ある語の説明があとに続く」というしるし ・先行詞が人の場合はwho、物の場合はwhich ・thatはどんな場合でも可 	<ul style="list-style-type: none"> ・英文の発音練習 ・質問に答える 	板書をせず、英文を暗記させる。
展 開 ①	15 言語活動	※活動の内容・手順 ①4人グループを作る。 ②封筒1〔カードA：※別掲3〕のカードを、1人3枚ずつ配る。 ③「スタート」の合図で、生徒1が教室の前方にある封筒2〔カードB：※別掲4〕から1枚を選び、暗記する。 ④グループに戻り、暗記した英語を他の生徒に伝え、手元のカードから適当なものを協力して選び、英文を完成する。 ⑤生徒1が完成した英文を暗記し、教師のチェックを受ける。 ⑥合格したら、生徒2と交替。同様の手順で、「ストップ」の合図があるまで活動を続ける。		グループ内で協力しているか。 はっきりと自信をもって発音しているか。
展 開 ②	12 本文の要点の理解	①オーラルインタラクション(ピクチャーカードを提示) ②開本させ、CDを聞かせる ③重要単語、表現について質問 <ul style="list-style-type: none"> ・現在完了(1行目) ・left(1行目、13行目)の意味 ・You must be joking!の意味 	<ul style="list-style-type: none"> ・本文の要点を聞き取る ・質問に答える ・本文を見ながらCDを聞く ・質問に答える 	
	音読練習	音読指導	<ul style="list-style-type: none"> ・CDについて新出単語の練習 ・CDについて1行ずつ練習 ・CDについて登場人物のセリフごとに練習 ・各自で練習 ・CDと同時に練習 ・ペアで練習 ・指名なし音読 	スピード、リズムにも留意する。
ま と め	1 宿題の提示	ノート整理・ワークブック 自己評価表〔※別掲5〕の記入・ 提出の指示		
	あいさつ	あいさつ	・あいさつ	

〔別掲1〕 Fun!Fun!Reading : レベルC トピック5 “Karaoke”

〔別掲2〕 ワークシート

<p>【PART1】職業</p> <p>(1) _____ (2) _____</p> <p>【PART2】職業</p> <p>(3) A _____ is a person who makes bread and cakes to sell them in a shop.</p> <p>(4) A _____ is a person who helps a doctor and takes care of sick people.</p> <p>【PART3】日本独特のもの</p> <p>(5) _____ (6) _____</p> <p>【PART4】日本独特のもの</p> <p>(7) _____ is a set of sliding doors which are covered with paper between rooms in a house.</p> <p>(8) _____ is a short poem which has 17 sounds in 3 parts.</p>
--

〔別掲3〕 封筒1 (カードAの例:計12枚)

<u>which</u> people in China speak.	<u>who</u> discovered America in 1492.
<u>which</u> a lot of children watch every Thursday.	
<u>which</u> has many mountains and lakes.	
<u>who</u> wrote "Romeo and Juliet."	

〔別掲4〕 封筒2 (カードBの例:計12枚)

Chinese is a language	Columbus is an Italian sailor
"Pocket Monster" is a popular TV program	
Canada is a beautiful country	
Shakespeare is a British writer	

※参考図書 COLUMBUS Activity事例集

4 授業の考察・成果

(1) 授業は英語中心で進め、口頭表現の機会を増やす

教室英語や言語活動だけにとどまらず、速読のpre-reading活動としての英問英答や教科書本文のオーラルインタラクション等、授業のさまざまな場面において口頭で表現しあうことを心掛けた。「相手に届く十分な声量」で「相手に内容を伝えようと努力する態度」を日常的に伸ばしていける良い方法である。

(2) コミュニケーション活動の継続

日本人教師単独の授業や外国人講師とのTTにおいてコミュニケーション活動を積み上げてきた結果、本時のようなchallengingな内容の活動にも積極的に取り組ませることができた。適切なtaskが設定され、楽しく活動することを通して、「言語材料の理解や定着を確実にする視点」を常に念頭に置くことが大切である。

(3) グループ活動と生徒個人の暗記チェック

生徒同士で助け合い、協力しあう活動によって、リラックスした雰囲気での学習を進めることができた。また、クラス全体の前では緊張してしまう生徒でも、教師との1対1の場面では、自信をもって発音することができていた。

(4) 概要から細部へ

「まず、概要をつかむ」ことから始める。「読む」「聞く」活動で強調するだけでなく、「話す」活動においても、大切なポイントを相手に伝えようとする意識をもたせることにもつながる。

※「別掲5」生徒の自己評価の集計結果

①きちんと声を出して発音練習できましたか	A (11名)	B (15名)	C (6名)
②協力してグループ活動ができましたか	A (19名)	B (13名)	C (0名)
③グループ内でいちばん活躍した人は	(省略)		
④関係代名詞を使った英文を暗記できましたか	A (13名)	B (14名)	C (5名)

5 課題

(1) 3年生の発達段階にふさわしい内容・方法をもつコミュニケーション活動の開発

「練習用に作られた情報のやり取り」の段階を越えて、「身の回りの事実」を表現し、さらに「自分の考えや意見等」を伝えることもできるような活動の開発。

(2) 3年間の英語学習をまとめる観点

学習中の教科書の当該ページに関するものだけでなく、既習のすべての言語材料を駆使して表現しながら、英語学習の総復習ができる「系統的」で「継続的」な活動の開発。

(3) コミュニケーション活動の評価

コミュニケーション活動が「楽しさ」「動機づけ」「その場限り」で終わらずに、英語の運用能力が向上するという事実が生徒自身に実感されるような評価方法の開発。向上的変容が自覚できる自己評価が、生徒にとって一番の励ましになる。

(4) 扱う題材の広がり・発展

TV番組や学校生活等の身近な題材から一步踏み出し、環境・平和等の題材にも積極的に触れさせ、生徒にとって「身近であるべき題材」の幅を広げ、発展させること。

V まとめと今後の課題

生徒がのびのびと意欲的にコミュニケーション活動に取り組むには、どのような指導を継続していけばよいのか。これが本研究の主題である。その方策として、1)身近な題材を用いること、2)評価を工夫すること、3)生徒が気軽にコミュニケーションできる場を設定すること、この三点を研究主題に迫る仮説とし、学年ごとに分科会を設けて研究を進めた。分科会を学年ごとにしたのは、学年によって生徒の発達段階や知的好奇心の度合いが異なるので、同じ仮説に対して、各学年がどのようなアプローチをすることができるかを明確にしたかったからである。

第1学年分科会では、間違いを気にせずにコミュニケーションできる雰囲気作りを土台として重視した。1年生の段階で複雑な内容を伝えることはかなり困難である。そこで、学校生活や芸能、スポーツといった、誰もが共通の話題として言及できる身近なものを対象とした。コミュニケーションに対する生徒の意欲は強く、生徒の興味・関心を刺激する題材を提示することの効果を確認した。教科書本文の一部に対する置き換え作業は、この段階の生徒に自己表現の楽しさを感じさせる上で大変意義があった。評価においては、生徒の努力した点に注目し、励ますことを第一とした。

2年生になると、1年生に比べ言語材料が急速に増え、それによって表現に多様性が生まれコミュニケーション活動も活発になってくる。だが、生徒にとっては、複雑な形態の英文は難解さを感じ、英語で表現することを尻込みすることになってしまいがちである。だからこそ、自分の感情や意見を表現してみたいという意欲を起こさせるような話題作りや場の設定が毎時間必要になると第2学年分科会では考えた。既習の言語材料を積極的に取り入れ、生徒が興味をもっているようなことや生徒の日常生活の中の出来事などを題材にして活動させることで、英語に対する抵抗感が薄れ、のびのびと取り組む生徒が多くなった。また、ただ単に言語活動をしたということに終わらせるのではなく、生徒のさらなる意欲向上につながる評価方法について今後も考えていきたい。

第3学年分科会では、3年生としての発達段階に見合った題材は何かを考え、気軽にコミュニケーションするとともに、生徒の知的好奇心を満足させる活動を模索した。生徒の興味を抱く分野は個人によってかなり相違があり、題材ができるだけ多岐にわたるようにした。評価に関しては一人一人の生徒の能力を伸ばすことに着眼し、教師による評価、生徒同士による相互評価、生徒自身による自己評価を組み合わせながら授業を行った。トップダウン方式による教科書指導と、それに培われた英語力を駆使した言語活動が継続的に行われることの重要性を実感した。

本研究会ではそれぞれの学年分科会の視点から主題に取り組んだわけだが、どの学年が、どのような活動をするにしても、明るい雰囲気の中で、間違いに気をとられることなく英語を使ってみることが最も重要なファクターであることは共通の認識であった。授業実践を通してこのことの大切さを再認識した。各学年の発達段階に応じて題材を選択し、授業の中でいかにコミュニケーションする場を与えるかを教師は常に考えなければならない。学年の進行にともなって英語嫌いの生徒が多くなる現状がある中で、英語を学ぶことの喜びを生徒が発見できるように、継続的な活動を徹底していくことが今後の課題である。